

# 平安時代漆芸技法資料Ⅸ

## —河内金剛寺蔵の二つの蒔絵の箱について—

中 里 寿 克

金剛寺には平安時代の蒔絵の箱が二つ蔵されており、それらについては今日までに幾つかの論考があるが、ここで改めて取上げて、漆芸技法の上から考察してみたい。

### I 野辺雀蒔絵手箱(重要文化財)

法量 蓋 423×283×105 ミリ  
身 401×265×172 ミリ

#### 1. はじめに

野辺雀蒔絵手箱については、発見者である吉野富雄氏の論考がすでにあり、これについて述べるのは蛇足とも思えるが、平安時代の重要な遺品でもあり、このシリーズからははずす事も出来ないので、あえて後塵を拝することとした。

この手箱が発見された経緯は、吉野富雄氏自身が述べているが、それによると昭和十年の秋の事である<sup>1)</sup>。

発見当時の状態は、艶は失せ、鍔は佚し、後世の修理の跡があつて塵周の塵居は失なわれ、蓋鬘(側面)の前辺が後補になっていたといわれる(図. 7)。その後、昭和32年頃吉野氏自身の手によって修理され、今日見られる様な姿になっている。その修理によって塵居が整えられ、蓋鬘の前辺は後辺にまわされて、絵のある後辺が前辺に嵌込まれる様な大改修が実施されたのである<sup>2)</sup>。



図. 1 野辺雀蒔絵手箱 甲面

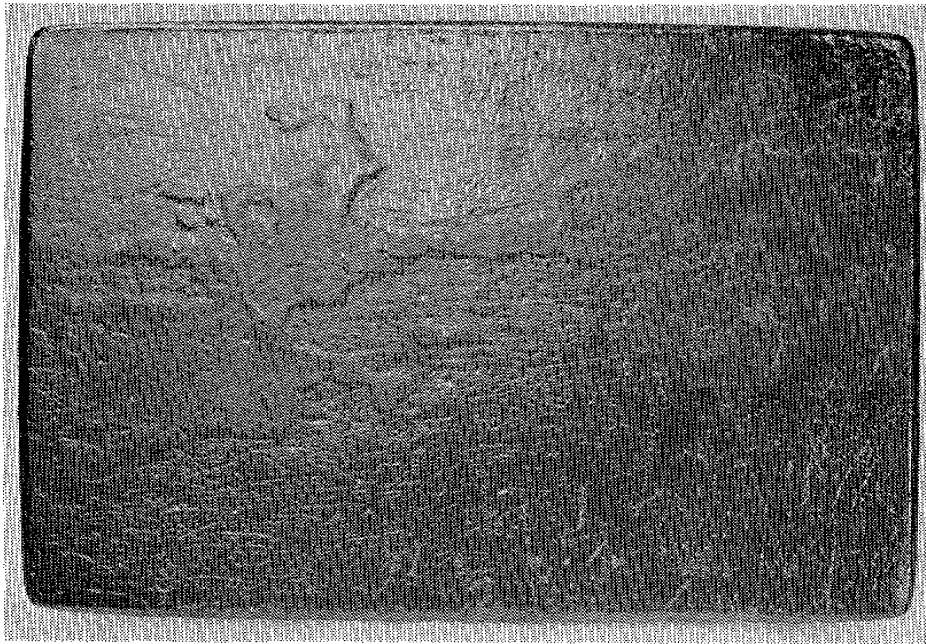


図. 2 野辺雀蒔絵手箱 身底面

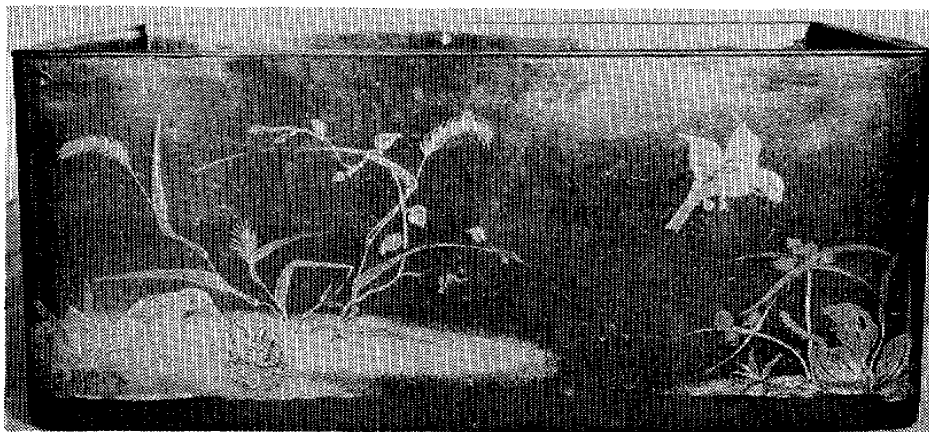


図. 3 野辺雀蒔絵手箱 身側面

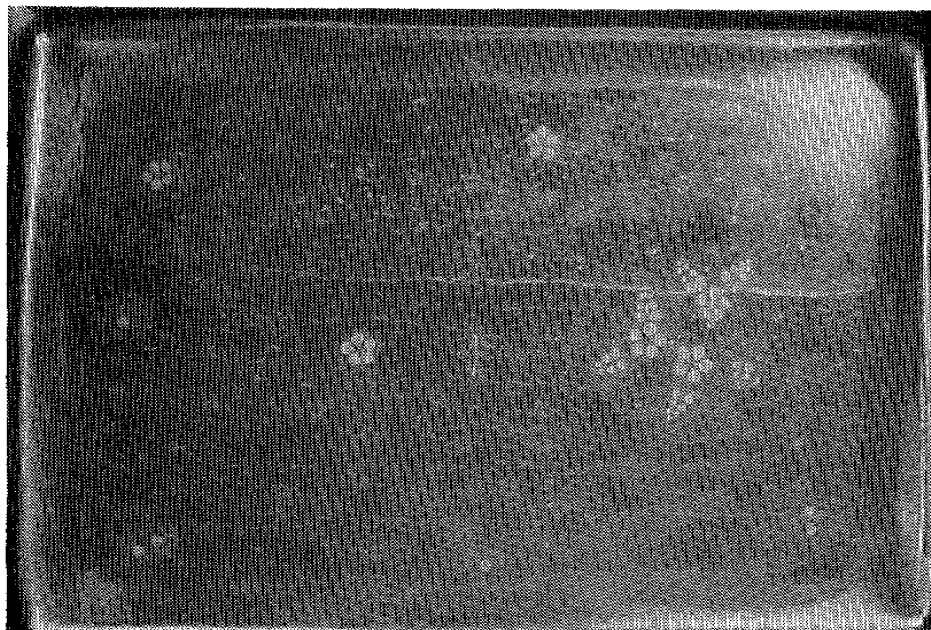


図. 4 野辺雀蒔絵手箱 蓋見込面

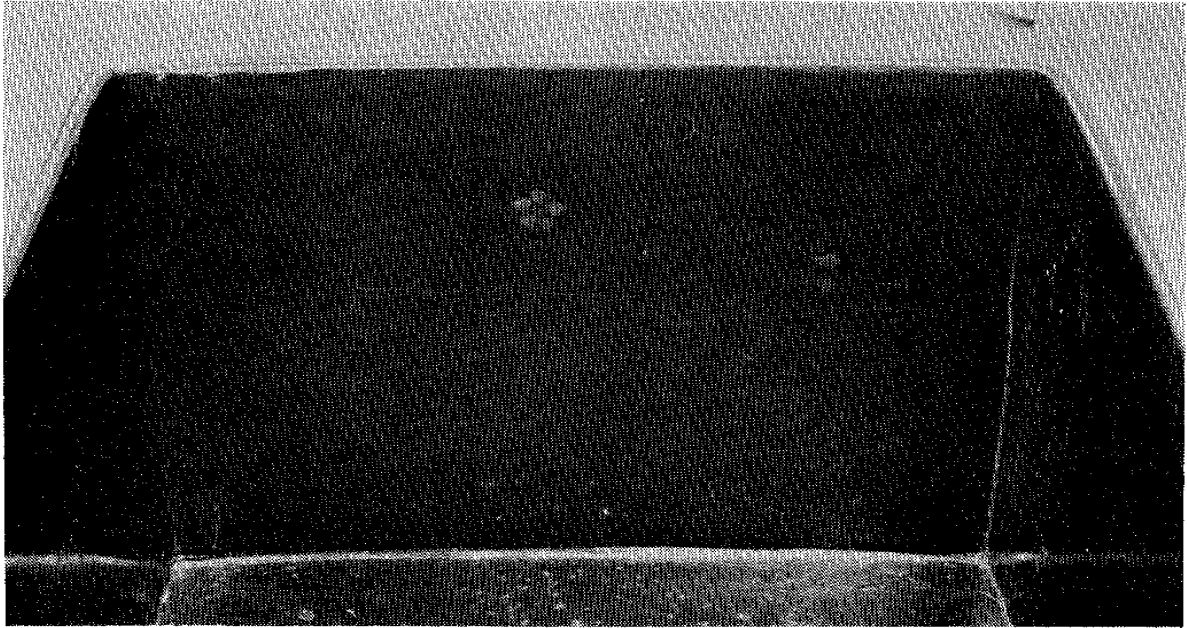


図. 5 野辺雀蒔絵手箱 身内側面

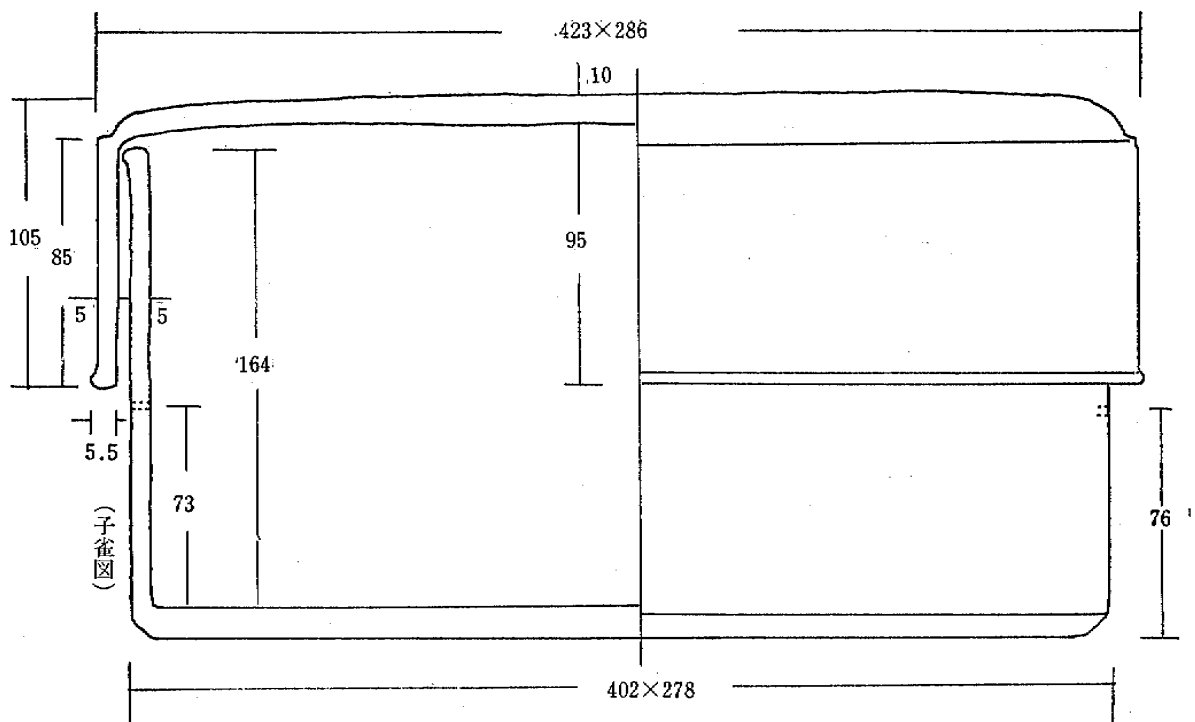


図. 6 野辺雀蒔絵手箱 実測図

身の方はそれほどの大修理は行なわれず、口紐部で当初の例にならって紐を廻して仕上げたといわれるが<sup>3)</sup>、畳づれ部分などは蒔絵にかかる欠損部が多く、塗直しが全周にある。その他甲面などで蒔絵の重要な部分で欠損があるが、全体的に往年の姿を偲ぶ事が出来る。

箱の形式は身の半分を覆うやや深目のかぶせ蓋となり、ゆるい胴ばりとして丸隅でまとめるが、解体されていない身の平面は、四隅は以外に鋭く丸められており、引締っている。甲盛はゆるやかで中央部は平面に近い。紐は蓋身とも見られるが、もちろん先述の通り当初のものではない。

一部を除いて蓋見込みは甲盛に対応して、ゆるやかにくぼませる。又身にはせまい畳づれを造るが、これも後補の手が多く入る。

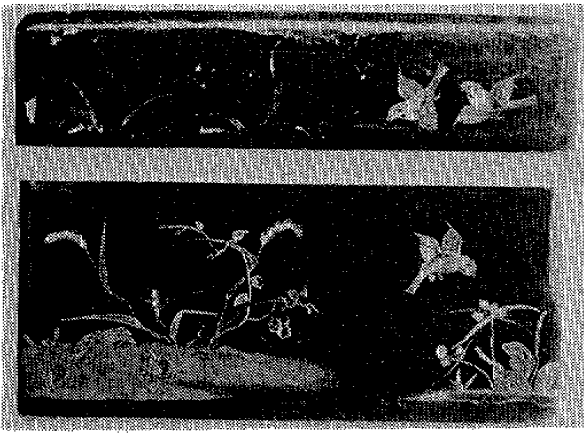


図. 7 発見時の野辺雀蒔絵手箱  
(『大和文華』4号より)

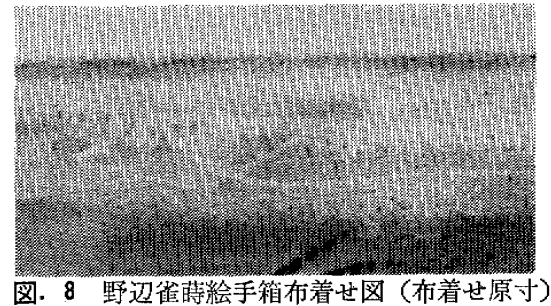
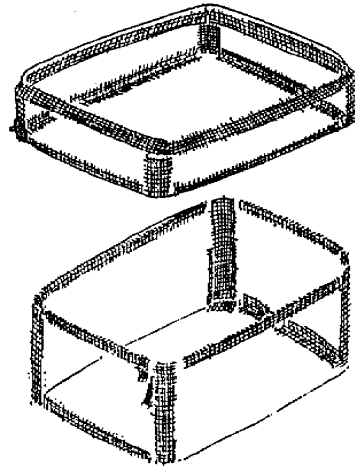


図. 8 野辺雀蒔絵手箱布着せ図(布着せ原寸)

## 2. 素地について

蓋側面の厚さは平均5ミリほどあり、甲板は約10ミリである。身も側面は同様だが、底板は8ミリほどである。甲板は塵居を基準に考えれば20ミリほどの板を用いた事となり、蓋身の側板はゆるい胴張りを考えれば10ミリほどのものであろう。

40 cmにも及ぶ大振りの箱だがX線透視の結果では、板はどれも矧目なく、すべて一枚板の様である。隅の木組みについては、X線透視でもはっきりしないが吉野氏の記述によると、檜の良材で、蓋身とも四隅は一吋位に切組み、木釘を打っているといわれる<sup>9)</sup>。

## 3. 布着せについて

X線透視によって、ほぼ次の様な布着せの状態が判明した(図. 8)。

蓋では塵居の部分全周と四隅に見え、外面に主に貼られ、短側面で一部内面に認められる。更に口紐部を包む様に貼られるが、全周に貼られると考えてよい。

身でも貼られる場所は同じだが、四隅では一部に外内面に貼られる所がある。ただ底板部分の長側面では両面とも布着せが見えない。

用いられた麻布はやや薄手のもので、1 cm<sup>2</sup>に縦11、横13本程度のものである。

これらの布着せ部分はほとんどが後補の部分でもあるわけで、修理の際に貼った可能性もあるが、麻布が総て同種である事、貼り方に特に相異が見られない事などを考え合せば、後補の可能性は少ない<sup>9)</sup>。

これらの布着せの状態を見ても、ほぼ平安時代の典型的な施工と考えてよからう。

## 4. 蒔絵の技法について

漆は透けて赤味をおびており、特に内面の塗漆は平安時代の箱内に見られる栗皮色の漆そのものである。

外面も研出蒔絵のため内面の漆と同じ透漆が塗込み用として塗られるはずだが、あまり目立たず、中塗の黒い漆を通して少し黒ずんで見え、又研出しのための部分的な研むらもあまり見えず、全体に色相の変化はなく落ち着いた塗膜がみられる。

蒔絵は淡い平塵地に金銀の研出蒔絵だが、この蒔絵技法は蒔ぼかし、蒔分けを主体に、内蒔き、書割りの技法も含まれる。

蒔絵の特徴としては土坡を蒔ぼかしとするのに金銀を用いる所があり、銀を内部に金をその周辺に蒔ぼかしにする(図. 9)。銀を内側に蒔いた事によって、現在はその銀が錆びて銀粒をかくし、やわらかな大地をみごとに表現している。この逆に蒔いたとしたら、銀の効果はまったく発揮されなかったろう。

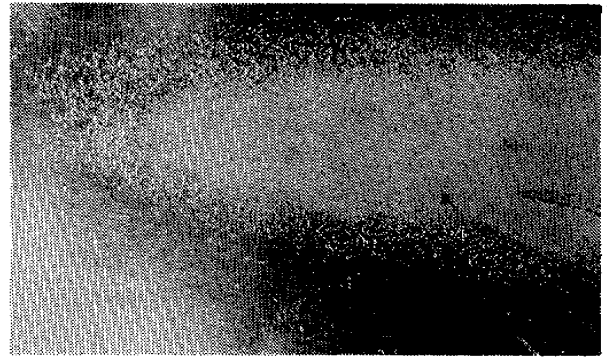


図. 9 野辺雀絵手箱金銀蒔ぼかしの状態

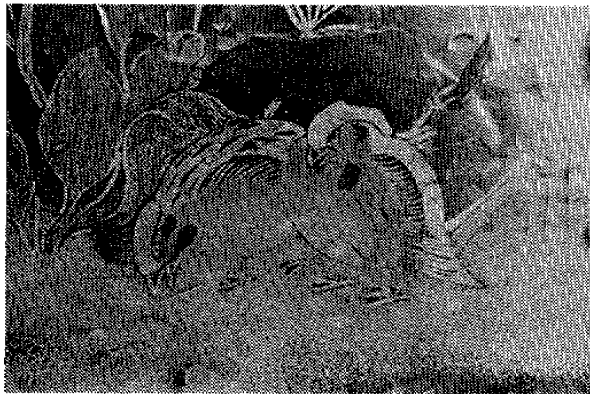


図. 10 野辺雀蒔絵手箱の蒔絵の細部

蒔ぼかしの技法は鳥文にも用いられ、腹部や羽のつけね、尾などに蒔かれる(図. 10)。粉の散り具合から推して、鳥文の全体を漆で画いた後金銀を蒔ぼかしたのだと思われる<sup>9)</sup>(図. 11)。

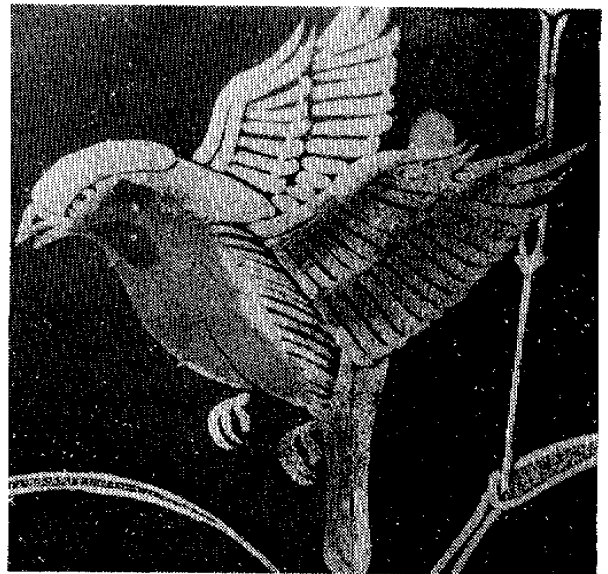


図. 11 蒔ぼかしの状態(X線透視写真)

蒔分けは草花の部分に多用される。例えばオオバコの葉では輪郭を金とし、葉すじを銀として、そこに金を内蒔きとしている。狗尾草では穂の毛を金とし、実を銀で実わしている。露草等は土坡の銀量にかくれて判然としないが、銀の輪郭に金の内蒔きとしている。

書割りはあまり目立たないが、鳥文の腹部を分ける線の部分や、鳥と鳥が重なる部分等に具体的に用いられ、鳥文、草花文などの文様を土坡から浮上らせるのにも当然用いられる(図. 10)。

内蒔きはあまり重用されず、葉の輪郭内を埋めるのに見られる程度である。

内面の蒔絵は他の平安時代の遺品には見出せない珍しい技法が用いられる。蓋内面の見込み部分のみは梅花文を散らし、例の赤色透漆を全面に塗って研出しており、そのため赤い塗込み漆は文様周辺や、中塗の凹部などに部分的に、水たまりの様に不規則に認められるが、この部分のみは普通の研出蒔絵と考えてよいものである。しかし周囲の側面では、その技法を異にしている。すなわち簡単にいえば「部分研出し」とでも呼称すべき技法である(図. 12)。銀で

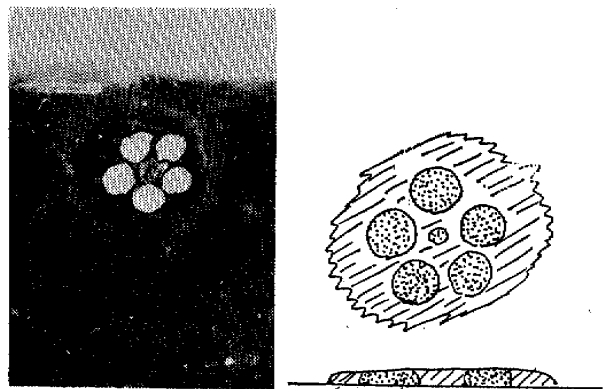


図. 12 身内側面の「部分研出し蒔絵」

梅花を画くのは同じだが、全面に塗込みを行わず、文様の部分のみ塗込みを行って研出しを行っている。身内の散文も同様の技法を用いており、この様な技法は類例がない。やや黒い中塗の上に、部分的に赤色透漆を塗るために、銀の梅花よりも赤味の方が目立っている。なお、梅花の部分は銀細文を蒔くが、花芯や枝は銀の銹暈がなく異なった粉を蒔いていると考えられる。錫粉かもしれない。

以上の様に蒔絵技法は四種が並用される事が知られたが、ここでは蒔ぼかしの技法が大きな比重を比めることに注目しておきたい。土坡に蒔ぼかしが用いられるのは仏功德蒔絵経箱や沢千鳥蒔絵小唐櫃などだが、これらはそれぞれニュアンスを異にした施工がみられる。前者が金のみで行っているのに対し、後者は金と青金を交互に蒔分ける技巧をみせ、この手箱に至ってそれが更に金銀を蒔ぼかす所まで発展してくる。土坡の蒔ぼかしだけで見ても、沢千鳥蒔絵小唐櫃の蒔絵より進んで、暫新たな感覚が養なわれた事を感知しないわけにはいかない。

ひるがえって11世紀から12世紀にかけての蒔絵遺品について、用いられる蒔絵技法を細かに拾上げてみると、いづれもここであげた4種の技法のどれかを並用している事が知られ、基本的な技法はそれほど多種にわたったとは思われない。しかしどの遺品の場合でも中心となって用いられる技法が存在し、その比重の違いによって作品の趣きが異なってくるのは当然の事である。蒔絵技法について私見が許されるなら次の様な事がいえよう。

仏功德蒔絵経箱は蒔ぼかしも用いられるがそれ以上に線描や内蒔きの比重が大きく、それだけに身近に置いて愛玩する様な作行きにはならない。同じ蒔ぼかしでも蒔絵筆の場合はその懸崖に見られる多彩な感覚の表現は、その効果が計算されたものであるにしろ自由な行為に羨望を禁じえない<sup>7)</sup>。

片輪車蒔絵手箱では螺鈿と波文の律動感に心を奪われるが、技法的に見ると波間にみられる内蒔きにこそ特徴があり、波文を画くよりもその間を埋めるのに非常な苦心を払っているのがわかるのである<sup>8)</sup>。中尊寺金色堂では蒔絵としての円光仏は、書割りに想像以上の神経を使っており、従来の書割りの方法では満足出来なかったのだろう。そこにまったく新しい書割りの方法が創案されたとも考える事が出来る<sup>9)</sup>。

こうして当代の蒔絵遺品をみて行くかぎり4種の蒔絵技法にも流行があり、13世紀に近づくとつれて蒔ぼかしなどはむしろ廃れ、より直載的な平塗りの蒔絵が好まれる様になった。そこに初めて、本格的な書割りの必要を感じたのであり、更に内蒔きなどで画面の変化を求める様な感覚も養なわれたのである。内蒔きの効果は平塵地と共に、そのまま鎌倉時代の平目地に発展して行くわけである。

この様な蒔絵の歴史の流れの中で、この手箱を考えてみると、そこに示される蒔ぼかし技法の重要性と時代性が浮び上ってくる様に思える。蒔ぼかしのやわらかな効果と、その主題が示す平和な世界は手箱というにふさわしいものである。

## 5. 蒔絵粉について

蒔絵粉は金が三種、銀は二種の様だが文様粉は銹暈のためはっきりしない。

金	平 塵 地	長形の粒が多い。土坡の粉と同じか、	図. 13
	文 様	大小混じて雑。やや円形に近い。	図. 14
	土坡・内蒔	米粒形多い。粒子はかなり揃う。	図. 15
銀	文 様	粒子が細かい。粉形不揃。	図. 16
	土 坡	細長粉や角ばった粉が多く雑然とする。	図. 17



図. 13 平塵粉(金)

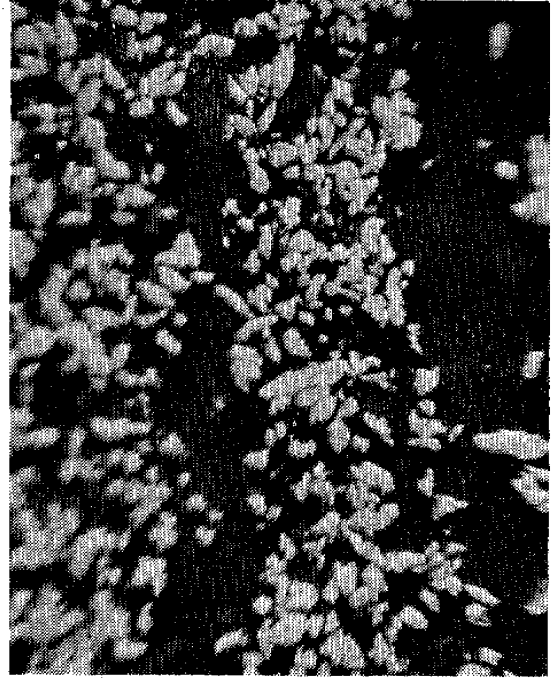


図. 14 文様粉(金)



図. 15 金粉(土坡)

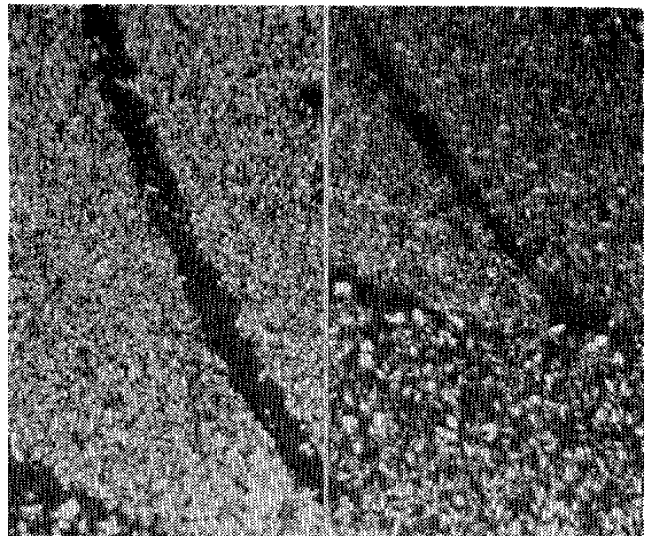


図. 16 文様銀粉  
(右半は、銀文様粉(上)と銀土坡粉(下)の比較)

銀粉は金粉に比して明らかに粒形を異にし、かなり角ばっている。この傾向は一般的なもの  
で、銀粉は青金と共に円味にかけるのが普通である。遺品の上では銀は錆のためにその粒形を  
見る事が出来ないのが通例で、調査を妨げる場合が多いが、X線透視によって辛じて判断出来  
る(図. 18)。ここでは修理の際、錆が除かれて一部観察出来たが、当代の典型的な銀粉とい  
えよう。

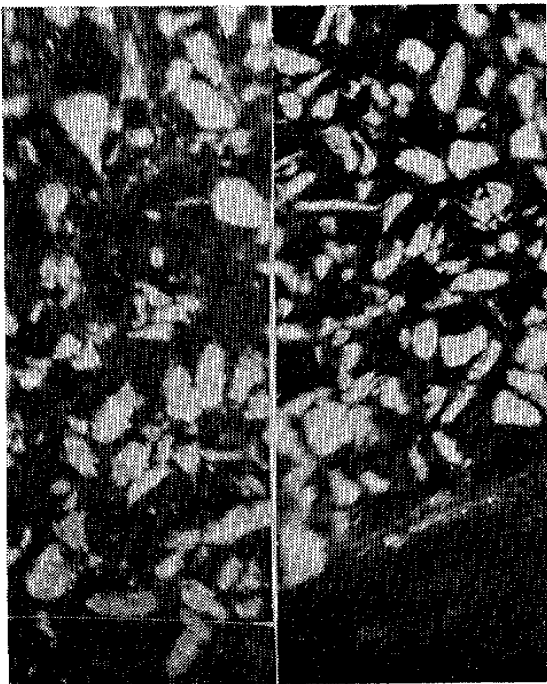


図. 17 銀 粉 (土坡)

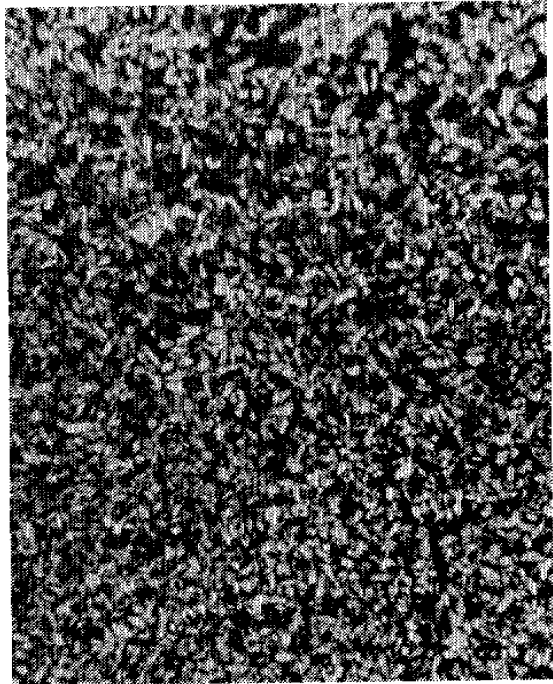


図. 18 土坡部分のX線透視写真  
(上方、白いのが金粉、中央部は銀粉)

## Ⅱ 蓮 花 蒔 絵 経 箱 (重要文化財)

法量 蓋 319×176×130ミリ

身 305×165×116ミリ (上39, 中39, 下35ミリ)

### 1. は じ め に

この経箱は古くから知られており、明治32年にすでに旧国宝に指定されている<sup>10)</sup>。

蓋表面、身の各段には蓮花や波文が画かれるが、12世紀の経箱にはこの様な文様が一般的になつたらしく、ほぼ同様の図柄を持つ経箱が幾つか知られる。代表的なものとしては俱利迦羅龍蒔絵経箱があり、七寺の一切経経箱も同様で、更に13世紀と考えられる勸修寺蔵の蒔絵経箱や、更に仁治三年(1242)銘の当麻寺本堂厨子扉等、その遺例は多く、流行した時期は長い。

この経箱は三段の内箱を重ね、その上を深いかぶせ蓋で覆う(図. 19)。身箱は各段を印籠口で合せ、下段には疊づれをつくる。各合口部には太い紐を廻す。蓋の長側面の両方には二重の手ぐりをつくる。

側面はゆるやかな胴張りとし、甲盛も僅かに見られる。塵居はやや形式的になっている。

表面の文様は先述の通りだが、内面には蓮花を散している。内箱の各段とも見込みには画かず側面にのみ見られ、蓋内は、見込、側面ともに散らされる(図. 20~25)。

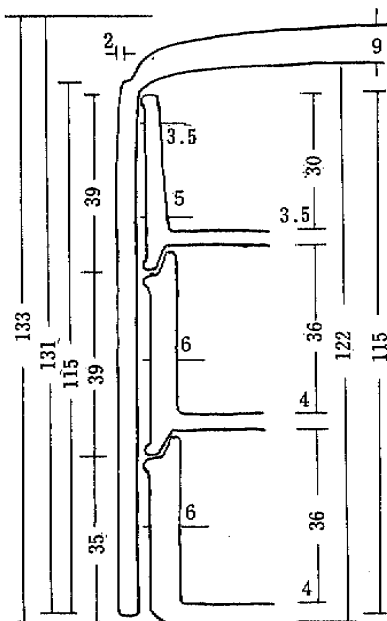


図. 19 蓮池蒔絵経箱実測図



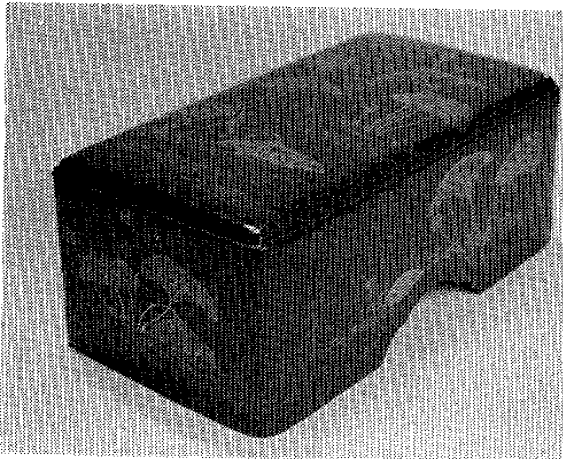


圖. 20 蓮花蒔繪經箱



圖. 21 蓮花蒔繪經箱 蓋側面

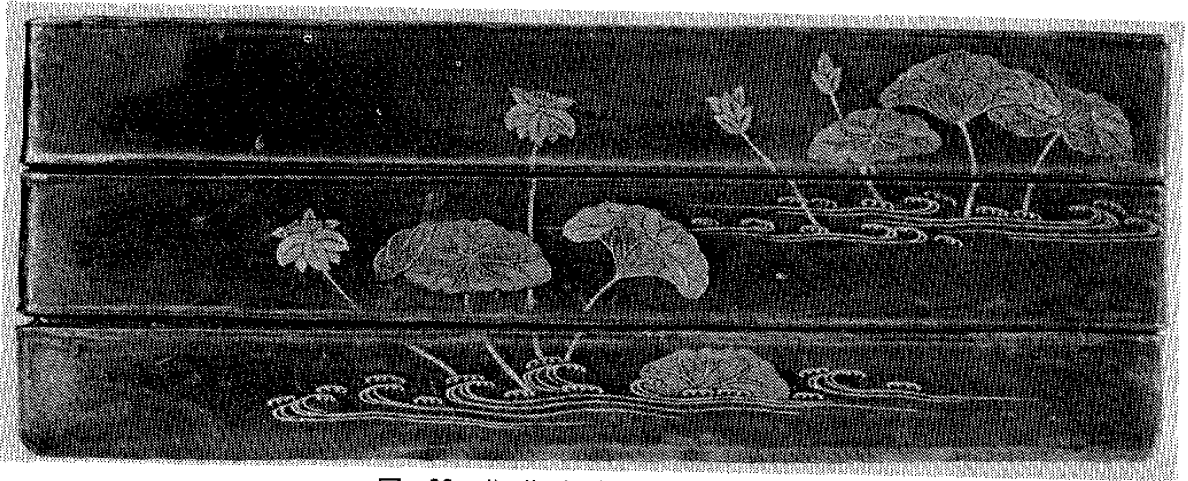


圖. 22 蓮花蒔繪經箱 身側面

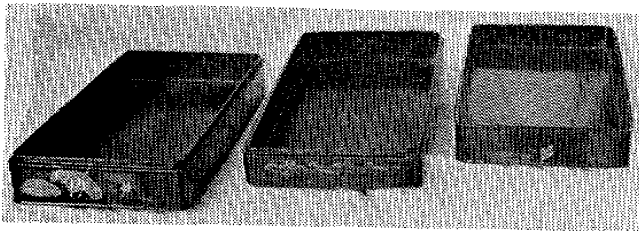


圖. 23 蓮花蒔繪經箱 身側面

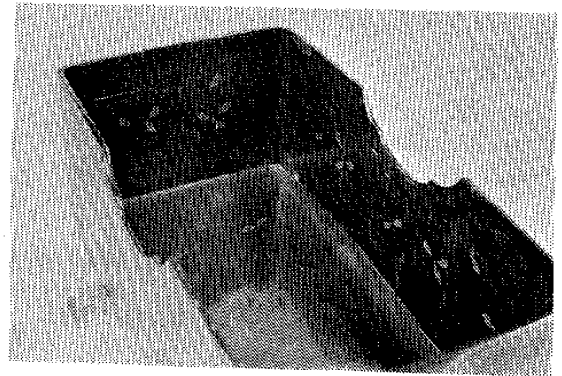


圖. 24 蓮花蒔繪經箱 蓋內面

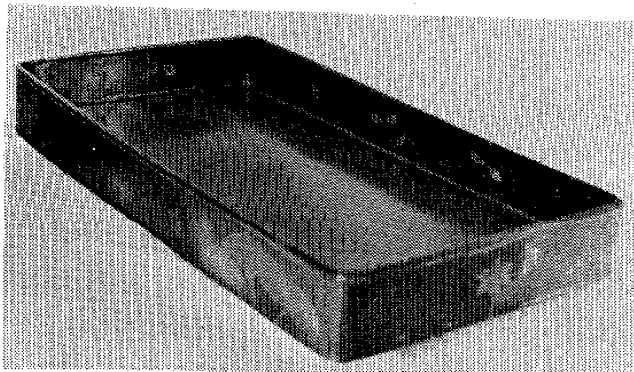
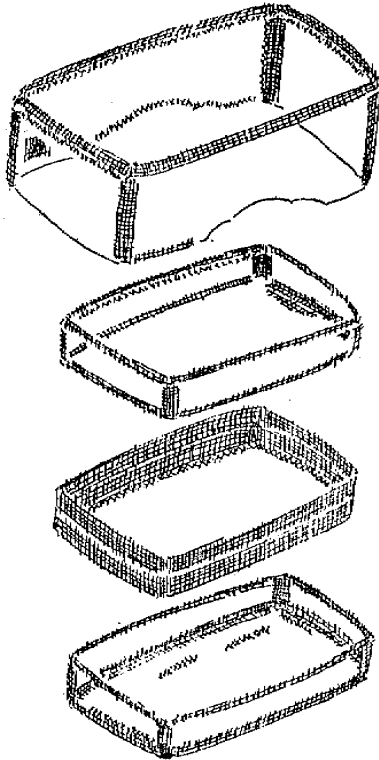


圖. 25 蓮花蒔繪經箱  
身側面內面 (上段)

## 2. 素地構造及布着せについて

X線透視の結果によると素地は蓋・身とも矧目なく、すべて一枚板だが、材は柾目の良材であるかどうかははっきりしない。ただ蓋の側板のみははっきりしており、木目は粗いが柾板が用いられ、おそらく檜であろう。身箱の下段の底板には一部木割れがあったらしく、筋布着せ(幅6ミリ,長さ17cm)が見られ、この板は板目である。



隅の柄組についてはX線透視でもはっきりしない。おそらくいもつぎではないかと考えられる。その他箱組みについては、まったく明らかにされなかった。

この経箱の形式と近い関係にある俱利伽羅龍蒔絵経箱では、木組はやはりいもつぎであり、身箱の立上りは片木を廻して造るのが知られているが<sup>14)</sup>、この経箱では削出しの様である。

布着せについては、かなりはっきりしており、蓋は塵居部と四隅で、塵居部では内にも行う。口紐部にも認められるが、両短側面には見られず、長側面でも一方にのみ、手ぐりの部分に認められている。蓋の口紐部には全長に塗直しがあり、文様的にみても波文の一部が不自然に切れており、手ぐりは後世の造作の可能性もある。

身箱では上段は口紐部と四隅に行なうが、底部のみは内面と外面に貼られるらしい。中段では側面は口紐部と底部との布着せが接近して、結果的にほぼ全面に貼られており、又内面には貼られたかどうかははっきりしない。下段では口紐部と底面と四隅にみられ、底面のほとんどには内面の布着せが認められる。底面には先述の様に木割れに筋布着せがあるが一部修理の際切除されており、布着せは内面に行なわれた事がわかる(図. 26)。

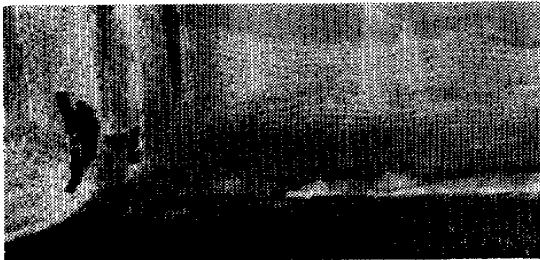


図. 26 布着せ図(布着せ原寸)

麻布は $1\text{cm}^2$ に16:16本ぐらいの薄手のものである。

箱内面に布着せを行う例は平安時代遺品にはあまり見ないが、この経箱の布着せ施工そのものは当代の一般的なものといえる。

## 3. 蒔絵について

表面は全面に淡い平塵を施すすが、蓮花文は金に一部青金を用い、内面は平塵なく、金と銀、一部金銀の蒔ぼかしによって蓮弁を散らしている。

蓮葉の蒔絵は特徴的である。細粉を濃く蒔いて文様を表わす基本的ともいえる蒔絵部分は以外に少なく、葉の返りなどの一部や、蓋表面文様の一二葉にかざられ(図. 27)、後の残りはすべて輪郭を線描で書きやや粗い粉を内蒔きとするものや、内蒔きの粉を薄蒔き又は蒔ぼかしで表現する技法がとられる(図. 28)。

僅かに描かれる細粉濃蒔きの蓮葉の部分、蓮花の部分では、白描に近い強弱のあるかきわり

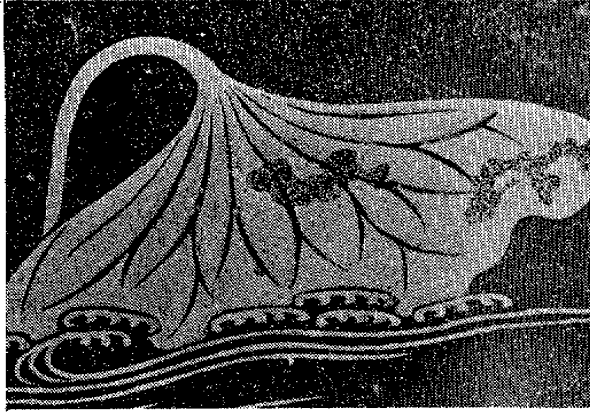


図. 27 細粉濃蒔部分のかきわり ↑

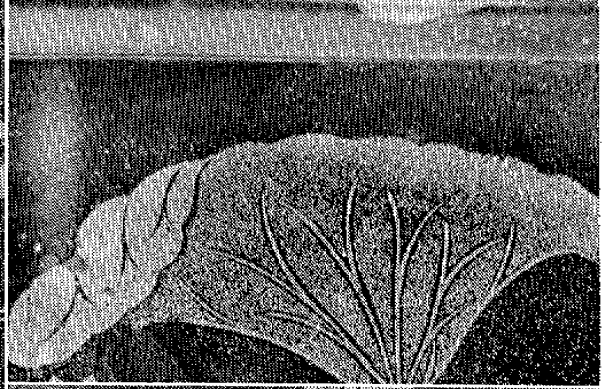


図. 28 内蒔き粉の蒔ぼかし部分 ↙



図. 29 透漆の地塗り状態 →

を見せ、このかきわりは薄蒔きの部分にも行っているが、平安時代の普通のかきわりに比して技法的感覚的に大きく発展したことを物語っている様に思える(図. 27)。それは単に隙間ではなくて仰揚のある筆線になり、流れる様な筆力が活かされている。中尊寺金色堂の蒔絵柱のかきわりも有機的な線が表現されていたが、この経箱の線はそれを更に一步進めたものとの感が強い。

箱の形式は俱利迦羅龍蒔絵経箱に近い事は先に述べたが、蒔絵の技法でもかなり類似した所が多い事が改めて知らされる。俱利迦羅龍のかきわりにのみ注目していたが、身の蓮葉蒔絵を見るとこの経箱の蒔絵に非常に近く、特にかきわりは既にかかなり白描風な表現を行っているのが留意される。

蓋内及び各身内側面の蓮瓣散しは、金や銀と共に金銀の蒔ぼかしが見られる。この様な蒔ぼかしも俱利迦羅龍蒔絵経箱の蓋内や身内にみられ、蒔絵技法からみた両者は製作年代がかなり接近している事を暗示させる。

蒔絵技法において特徴的な技法をもう一つあげておかねばならない。

平塵地とするのに行っている地塗りがそれである(図. 29)。ここでは文様をさけて透漆をかなり厚く全面に塗り、そこに平塵粉を蒔き、その上に更に透漆を塗重ねて研出しているが、文様周辺ではかなり研破れがみられ、黒っぽい中塗が所々に露出する。これら文様周辺の部分では地塗の赤っぽい透漆が非常に目立っており、朱漆を塗ったかと思える所がある。この漆は古代の漆芸遺品に一般に見られる特殊とも思える透漆で、普通は上塗に常用される。それを地塗漆として用いているのだが、地塗漆として適当かどうかは別にして、他にも用例があり、片輪車蒔絵手箱で同じ用途として見る事ができる<sup>12)</sup>。先述の野辺雀蒔絵手箱の内面で見せた赤色透漆と同種のものである。

千年近くも経た現在、この経箱の地塗漆は画面でムラムラに見え、画面にかなりの影響を与えている。施工法としては決して適応したものではない。

## 4. 蒔絵粉について

蒔絵が単純であるので、蒔絵粉もそれほど多種は使われない。

金	平塵粉	米粒形	図. 30
	内蒔粉	平塵粉と同じか。米粒形。よく揃う。	図. 31
	文様粉	大小混じる。やや円形に近いが多い。	図. 32
青金	文様粉	細長粉。金よりやや粒子が揃う。	図. 33
銀	細粉	不明	

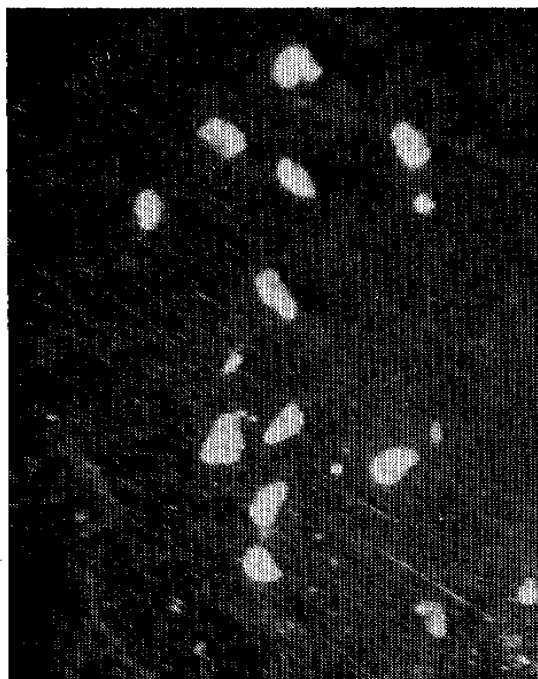


図. 30 平 塵 粉

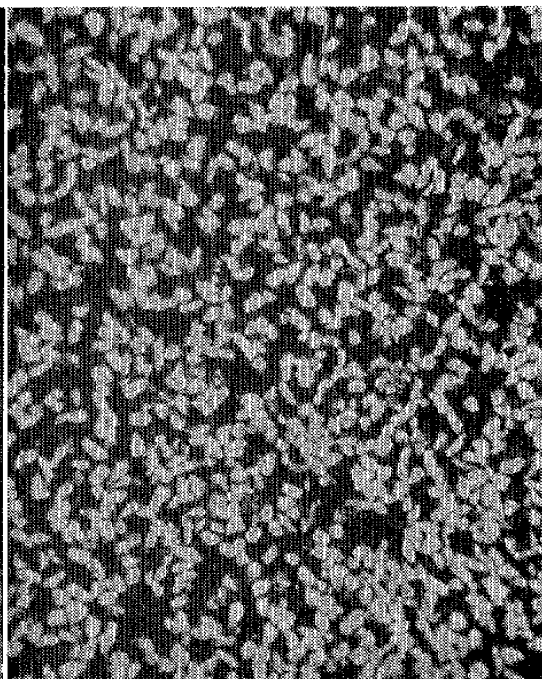


図. 31 内 蒔 粉 (粗)

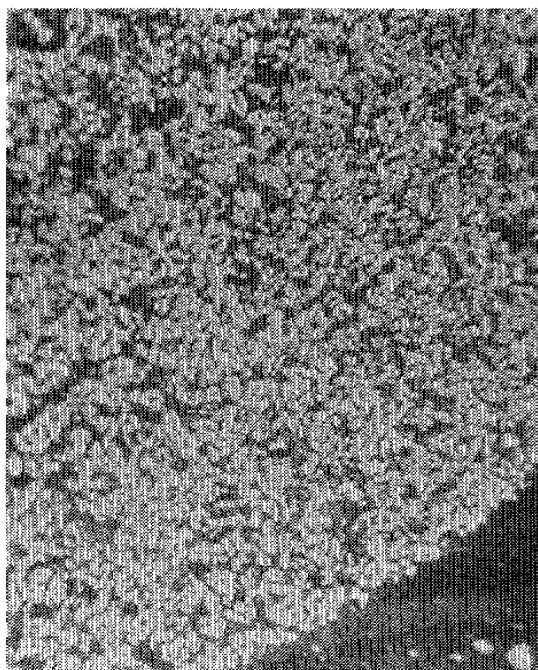


図. 32 文 様 粉 (金)

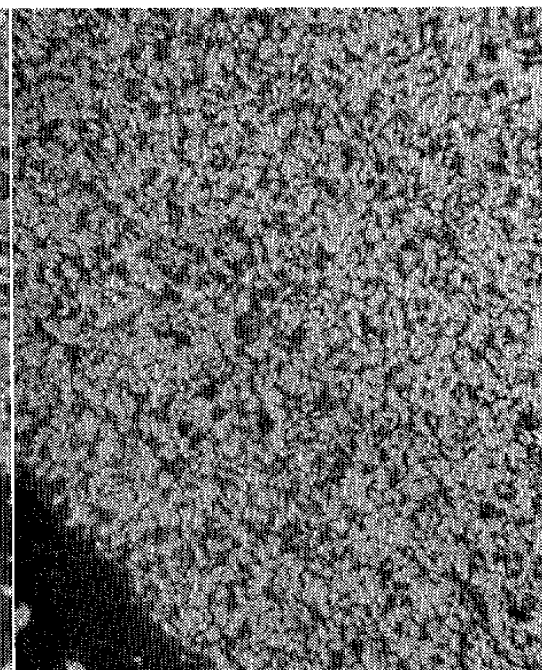


図. 33 文 様 粉 (青金)

内蒔粉は米粒形で円形に近づく様子が窺える。ここでみる内蒔粉は粒子はよく揃っており精選された良質の粉である。粉形が円味を示す形は11世紀に見られる蒔絵粉形に比して著しい特徴を持つ。青金は金に比してやや瘦身である。

青金が蒔かれた部分は判別しにくい、甲面の葉の返りの部分や、花の中心部に錆びて変色する部分があり、そこが青金ではないかと考えている。この錆びた粉は甲面にのみ認められる。平塵粉は粗目の内蒔粉に近く、ほぼ同質の粉であろう。

### III 結 語

野辺雀蒔絵手箱はその主題が示す様に、絵様の蒔絵であり、12世紀頃からようやく工芸品にも及んで来た和様が定着して生れて来た作品といえる。雀という題材がどの程度消化されていたかは、例えば和鏡背面文様には、それとおぼしい小鳥が飛び遊ぶ様子が手なれた筆致で表わされている物が多い事でも想像出来、更に竹と雀という組合せは既にこの頃からもはやされていた事が知られる。沃懸地螺鈿飾太刀（春日大社）の猫をまじえた意匠はつとに有名であり、三十六人家集の料紙文様にも円文風の竹に雀の意匠が見られる（図・34）。



図・34 竹に鳥文様（三十六人家集）

内面の梅文においても、12世紀の遺品に多く見られ、蒔絵筆の梅樹がその代表的なものであろう。蓋裏文様の配置がシンメトリーでなく中心を偏してデザインする傾向は沢千鳥

蒔絵小唐櫃から見られ、蒔絵品のみを求めても片輪車蒔絵経箱や鳳凰螺鈿円文唐櫃等をも上げる事ができ、新しい感覚と受留めてよいものかもしれない。

この手箱の意匠では蓋と身との関連性に注目しておく必要がある。蓋をかぶせた時に、身の絵と連続する必要があるのは、この様な絵様では無視出来ないわけだが、この手箱では蓋をどちら向きにかぶせても、図柄が連続する様に工夫を凝している所に、この手箱の意匠の本質がかくされている。文様的な意匠ではこの必要はないわけで、おそらくこの様な続絵の箱の意匠としては最古のものではないかと思われる。

この手箱では蒔絵技法としての蒔ぼかしの主体性について述べたが、画きづらい漆によって、これだけ生氣のある表現を可能に出来る作者の力量をこそ称えるべきであろう。

製作年代は私見でも12世紀前半、沢千鳥蒔絵小唐櫃にやや遅れた頃と考えている。

蓮花蒔絵経箱は、蒔絵技法としての地塗りの赤色透漆の使用に注目すべき点を見出しているが、蓮葉にみせた内蒔粉での表現や、蒔ぼかしによる細やかな変化も見逃しがたく、これらの技法によるとすれば、12世紀も遡って考えても不自然ではない。しかし経箱としての性格を考慮すればこの表現は保守的あるいは復古的要素と見做すべきであろう。

様式的、技法的には俱利迦羅龍蒔絵経箱に近いものを感じさせ、片輪車蒔絵手箱との関連も見逃せない。12世紀後半の製作を否定する材料はあまり見出せない。

この経箱の意匠も野辺雀蒔絵経箱同様、三段の内箱の文様を続絵としており、箱の積重ねに無駄な配慮をしなくてよい様に図取りされている。念のため他の経箱についても観察すると、勧修寺蔵経箱や西大寺蔵経箱等も同様の配慮がなされるのを知った。俱利迦羅龍蒔絵経箱は下

段しか遺されていないが、おそらく同巧であったと思われる。

他の13世紀と思われる手箱でも例えば出雲大社蔵手箱や、根津美術館蔵手箱も当然ながら配慮される。このような意匠が絵様文様の流行によって要求され、必須の条件であった事はたしかである。逆にその為に自由な表現に制限が加えられた事も事実であろう。

この小論において考察したX線透視による所見は、保存科学部石川陸郎氏撮影のものによっている。いづれまとまった論考が発表されるはずである。

金剛寺に蒔絵品を調査に伺ったのは、数年前になるが、心よく調査を許可された事を紙上より感謝する次第である。

#### 注

- 1) 吉野富雄「野辺に雀蒔絵手箱」『国華』790号 昭和33年、この他に『茶わん』133号 昭和17年、『大和文華』4号 昭和28年に同内容の論考がある。
- 2) 同上、「小さな鋸をもって（側面を）分解し、（後補の）新材の漆を研却して、両面から麻布を着せて古法の墨漆を施し、元の如く漆糊漆で張り合せた。四隅は塵居の2分位の空隙を生じたので、檜の細片を木屎漆で詰込んだ」とある。X線透視の結果でも、薄板の存在を確認出来る所がある。
- 3) 同上、「古法を復活して蓋の口には糸を巻いて造り上げた。」
- 4) 同上
- 5) 同上、布を着せた部分は後補の蓋鬘のみと思われる。（X線透視で確認出来ない）
- 6) X線透視写真で見ると、羽は二段になり、そのつけねの部分に銀が蒔かれるが、銀は劃然とならず金と混り合っている。
- 7) 拙稿 平安時代漆芸技法資料 V 保存科学 15号
- 8) " " VIII " 18号
- 9) 拙稿 金色堂内装飾の工芸技法について（漆芸）仏教芸術 72号 昭44年
- 10) 吉野富雄 時代蒔絵髹漆集成 第15輯 昭13年
- 11) 平安時代漆芸技法資料 II 保存科学 4号 昭43年
- 12) 同上 VIII 保存科学 18号 昭54年

## Technical Data of Lacquer Work in the Heian Period (IX)

Toshikatsu NAKASATO

The author examined two Maki-e boxes (boxes decorated by the Maki-e technique) owned by Kongo-ji temple in Osaka, by using a binocular stereo-microscope and X-ray radiography.

I) *Nobe-Suzume* Maki-e Tebako, Box with design of sparrows in field, designated Important Cultural Property.

The design is all described by Togidashi Maki-e (burnished Maki-e). To express the design of sparrows and ground, Makibokashi (gradation), which is often seen in Maki-e works in the 12th century, was applied using gold and silver filings. The filings used in this Maki-e can be classified into three sizes of gold filings and two sizes of silver filings.

The particles of gold filings are slim oval while silver ones are wedge-shaped. The design of the sparrows in Maki-e works has been popularly used since the 12th century. The author concludes that this Tebako was made in the first half of the 12th century.

II) *Renge* Maki-e Kyobako, Sutra box with design of lotus flowers in Maki-e technique, designated Important Cultural Property.

Lotus flowers and waves are described by Togidashi Maki-e technique with gold and blue-gold (alloy of gold and silver) filings, on the outside of the lid and the three deked receptacles. On the inside are described petals of lotus flowers with gold and silver filings. The particles of filings employed in this box are round oval, and show the characteristic of the Maki-e works of the second half of the 12th century. The design and the form of the box also suggest that it was made in the 12th century.